



近江さん(左)と大塚さんはまず保育園にお迎えに

「あ、ドレッシングは、アマネくんが作るんだよね？」
 「うん、作る作る。まず、サラダ油でしょ、お酢でしょ……あー、入れすぎたあ！」
 午後7時半。6歳のアマネくんと妹のユウちゃん(2)、そして2人の女子学生というちょっと変わったメンバーで、にぎやかな晩ご飯タイムが始まった。
 この日のメニューは、母親の高安千穂さん(33)が、朝、仕事に行く前に作っておいてくれた、シチューとサラダ。午後6時に女子学生2人が母親の代わりに保育園にお迎えに行ったあと、一緒に食事をして、一緒に遊んだり、寝かしつけたり。両親のどちらかが帰宅するまでの時間を

企業だけじゃないインターンシップ 共働き家庭 体験してみる？

ただでさえ働くことに不安が大きいのに、本当に育児をしながら働き続けられるの？ 企業とのミスマッチをなくそうと始まったインターンシップが、「働き方」の体験にまで広がっている。



帰宅後、ひとりにはママのメモを見て、ママお手製のシチューなどを用意する



もうひとり、子どもたちと遊ぶ担当。アマネくんは、難解な宇宙の本を丸暗記。これも以前にインターン学生が貸してくれた本とか

自身の体験から起業

子どもたちと過ごす。一見ベビーシッターのようだが、実は違う。2人の女子学生、慶応大学3年の近江里菜さんと東海大学1年の大塚菜々さんは、とあるプログラムの真っ最中。その名も「ワーク&ライフ・インターン」。

仕事と生活のどちらも充実させる働き方はワーク・ライフ・バランスと呼ばれ、とくに出産や育児の負担がかかる女性にとって、働き続けるために不可欠だ。このプログラムは、実際に就職する前に子育てしながら働く家庭を体験する学生向けのもの。要は働くママ、パパの見習い体験みたいなものだ。学生たちは週1〜2回、大学の授業が終わったあと、2人1組で主に共働き家庭を手伝う。3カ月間、同じ家庭に通い、働

ながら子育てをする父母の生活を現場で体験する。学生は36時間を及ぶ研修で育児の仕方などを身につけて、割り当てられる家庭に向かう。交通費以外は無給。月数回、成果や問題点を報告し合い、先輩インターンなどからアドバイスをもらえるチームミーティングなど、フィードバックの場も用意されている。またインターン終了後は、インターンリーダーとなり、有給のインターンもできる。

このプログラムを提供している「スリール」は2年前、堀江敦子さん(27)が起業した。きっかけは、堀江さん自身が学生時代に、アルバイトで体験したある女性起業家のベビーシッターだった。「その女性は、仕事場に赤ちゃんを連れて行くことも多く、私も同行して秘書のようなこともさせてもらった。抱持ならぬベビーカー持ちです(笑)」そこで働きながら子育てすることの大変さや、喜びを体験した。仕事はどうしよう。子どもはどうしよう。不安だらけだった自分の未来の姿が、ほんやりと見えてきた。後に続く学生たちにも、同じ体験をしてもらいたい。そんな思いから当時勤めていた大手IT企業を辞め、「ワーク&ライフ・インターン」プログラムを提供するための会社「スリール」を立ち上げた。

就活中の不安

あちこちの大学で講演をしながら学生たちを集め、すでに30校100人以上の学生がインターンシップを体験済み。社会人を10年20年やっても明日すら見